
東方世界を求めた者が幻想入り

るーか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方世界を求めた者が幻想入り

【Nコード】

N4041X

【作者名】

るーか

【あらすじ】

青年は求めていた。

力を、能力を

自分が非凡になる事を。

自分が幻想になる事を。

その夢をかなえるべく、彼は飛んだ、世界へ――

始まりの話

薄暗い地下室のようなところそこには一人の青年がいた。

「ああ、やっとやっとか」

青年は呟いた。

歳は20、髪と眼の色は日本人的な黒色。

「何年だろうか。俺があの世界を求めて・・・」

彼は、自身の生涯をかけて、目指していた。
東方projectの世界を・・・

「俺が求めた世界に行こう——」

そう呟いた青年はその場から姿を消していた——

砂漠。

空には二つの月が浮かんでおり、周りには何も無い。

木さえ無い、砂漠では当然かも知れないが、自分以外の物があるそう言う空気が無かった。

「失敗・・・？失敗しのか！？」

先ほど姿を消した青年がいた。

何も無い砂漠に一人だけポツンと・・・

「ふざけんなよ・・・俺が一体何年いや何千年かけて作った術式だと思ってやがる・・・」

青年は泣いていた。

自らの失敗そして、自らの夢を達成できなかった悲しみ、悔しさ色々な感情が入り混じった涙を流していた。

どの位だろうか、青年元いた世界では数時間だろうか、その位時間が過ぎたにも関わらず、この世界は夜のままだ、月もまったく動かず、まるで時間が停止している様だった。

「月が動いていない・・・？それに何故だろう、自分の世界と言う感じがする。」

自分の世界・・・俺の心象風景とでも言うのか？
そう思考していると、頭に文字が浮かんできた。
正確には文字ではなく、声に近かった。

こっちこっち

と自分を呼び寄せるかのように

「このまま、ここにいっても始まらんし、行ってみるか」

そう決め、声が導いている方向へと足をすすめた。

元の世界で幾日分か歩くとそこには、砂の山があった。
普通人間は、のまず食わずで歩けるわけが無い。

なのにこの青年は幾日も何も食わず飲まずで歩いていた。
なぜなら青年は、世界を飛ぶために魔術、魔法と呼ばれる類の物を
再現し、作り上げたからだ。

青年の身体はもう、およそ人間とは呼べない代物になっていた。

「黒い・・・剣？」

その砂山の頂上には、黒く、何かを否定するかの様な雰囲気を纏った剣が刺さっていた。

そして青年は何かに導かれるように剣を抜いた。

——瞬間世界が暗転した。

始まりの話（後書き）

感想などお待ちしております。

剣の話

「何も見えない・・・」

青年の周りは真っ暗であった、闇其れよりも濃く、何も見えない。何なのだ？心象世界に着た今度は、何も見えない世界か・・・心の中で愚痴をこぼすと、徐に右手を前に出し、小さく呟いた。

「火」

右手には何の変化も起きなかった。

おかしい。青年はそう感じた。

先ほど青年は自身が色々な魔法や魔術、そういった類の物を掛け合わせて作った、新しい術であったからだ。

失敗は無い、自身が作った術だからでは無く、失敗など有りえない術だからだ。

「この場所が関係しているのか・・・？」

凄く興味がそそられた青年はそれから色々な術や、魔法、結界等自身の持てる技のほぼ全てを使って見た。
が。

一つも発動しなかった。

青年は一つ仮定を立てた。

この場所には、魔法などを発動するためのエネルギーが無いのではないかと。

「だったら、終わりだな。」

「何も出来ないな」

ハアと深くため息を吐き、それからはどうやって抜け出すかを考えていた。

《否定の場》

突然声が響いた。

青年は有りえないほど驚いた。

突然と言うのもあったが其れよりもその声は自分：：：の声だったからだ。

《在るのは、否定》

「お前は誰だ！」

《あらゆるモノを否定する剣の内側》

青年と同じ声は青年を無視し、話した。

其れは無視と言うよりは、テープの再生に近かった。
何度も何度も同じ事を繰り返していた。

「考えろ考えるんだ」

声は否定と言っていた。

否定する剣の内側とも言っていた。

否定する剣とは先ほど俺が抜いた剣だろう。

声を信じるなら剣の内側所謂精神世界だろう。
ならば――

突然頭の中に、何かの情報が流れ込んできた。

其れは、人間に否定された人間

其れは、世界に否定されたモノ

其れは、世に存在を否定された者

其れは、世界から否定された物

其れは、概念

其れは、願ひ

——故に、否定する

「がッ・・・」

脳が割れるような痛みを受けた青年はそのまま、気を失った。

剣の話（後書き）

感想お待ちしております。

出会いの話（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

くぱあと言う擬音と共に、一人の美しい女性が森の開けた場所に出てきた。

「おかしいわね、ここに境界の歪みが在るのに、何も無い・・・」

その女性は、顎に手を当て考えている様だった。

瞬時に色々な可能性を考え、その場合の一番良い解決法を模索しながら。

「・・・あああああああああああああああああああああ
あああああ」

「な!？」

その女性は悲鳴が聞こえた上を見上げた、其れとほぼ同時に何かに押しつぶされた。

「・・・いってえ・・・」

青年はそう言って、立ち上がると自身に怪我が無いか調べ始めた。
始めたと言っても、一瞬であつたが。

「さて、ここはどこだろうか？」

と、視線を下に向けた瞬間、自分が落ちてきたと思しきクレーターの中心地に美しい金髪で、人間ではない女性が居た。

「・・・に、人間じゃないって言ってもヤバイな・・・」

青年は、このままではヤバイヤバ過ぎると感じ、全力で走り出した。潰した女性の事なんて考えずに、とりあえず離れよう、じゃないと危ない、危なすぎる（復讐的な意味で）

「うおおおおおおおお」

青年はやはり人間を越えているのか、約時速100キロオーバーで在った。

そんなに速度を出していたため、直ぐには止まらない故に、目の前に開いた無数の目が覗く穴に突っ込んで行ってしまった。

「人間は急に止まれませえええええええええん」

青年は穴に入っていく何かを首に食らい首が飛んだ

だが、瞬時に回復しまわりを見回した。
が、其処には無数のギョロリとした眼と血のついたギロチンを持っ
た、先ほど潰した女性がいた。

「あ、あの・・・帰っていいですか？」

「う、うふふふふふふ」

その後数日間、青年は拷問されたらしい・・・

余談だが、その女性は虐める事がハマってしまったらしい・・・

出会いの話（後書き）

感想お待ちしております。

八雲との出会い、そして神との戦いの話（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

八雲との出会い、そして神との戦いの話

スキマの中で倒れている青年と其れを見下ろしながら恍惚とした表情の妖怪が居た。

「ふふふ・・・で、貴方は誰なのかしら？」

ようやく正気を取り戻した、女妖怪は倒れている青年に向かって誰だ？と聞いてきた。

ゆっくりと青年は立ち上がって一度ため息をだし答えた。

「俺は影秋・・・偽亭ぎてい 影秋かげあきだ。」

「そう、私は八雲紫、貴方・・・いえ影秋が言った通り妖怪よ。」

「なんの、妖怪なんだ？」

「隙間妖怪そう呼ばれてるわ。」

「そうか。」

青年――影秋は八雲紫の事を知っている筈なのだが、驚きもせず、普通に対応していた。

なぜかと言うと、彼はこの世界に来る時にこの世界に関わる記憶が消えていたのだ。

だが、漠然と自分の目的の場所はここだと分かった。

「で、八雲ここはどこだ？」

「敬語もないのかしら？ 人間の癖に」

「俺はお前より生きてるからな。」

一瞬八雲は驚いたような表情になるが直ぐに持ちかえし、胡散臭い笑みを浮かべながら、何歳かと聞いてきた。

「そうだな・・・三千・・・三千五百位かな。」

「は？」

「ありえないでしょ、靈力も全然ないし、魔力も無いのに。でも、気はあるみたいだけど。」

「ま、信じなくてもいいさ。そろそろ本題に戻っていいか？」

「え、ええ。」

「でここはどこだ？」

「ここは、幻想郷ですわ。」

「幻想郷ね・・・」

そんな地名聞いたことないな、と影秋は内心想った。

「ええ、そうよ。」

「じゃ、今は何年だ？」

「何年とは、外の時間で言えばよろしいかしら。」

「頼む。」

「西暦1000年位よ確か。」

西暦1000年・・・俺が生まれた時代が、2000年位で俺がこの世界に来たのが、西暦5000年だから、結構昔だな。

「で、何で貴方は上から落ちてきたのかしら？」

八雲は胡散臭い笑みを浮かべながら聞いてきた。

影秋は馬鹿正直に異世界からきました、と言ったら頭を心配されるだろう。

と思ったので、適当に言う事にした。

「ちょっと、空を飛ぶ練習してな、ミスって落ちた。」

「そう。じゃあ、さっきの瞬間回復は何？妖怪よりも上じゃない？」

「まあな、一応適当に編み出したんだがな・・・もの凄い役に立ってるし。」

影秋自身は最初に気が扱える事に気づいたときに身体能力強化と治

療のために、色々と練習していてその結果で生み出したのが、瞬間回復であった。
身体の細胞一つでも残れば其処から回復可能と言う、所謂チートである。

「適当って・・・まあいいわ、最後にこれが一番重要よ。」

「貴方は、幻想郷と敵対する――」

八雲が言いきる前に其れはやってきた。

圧倒的な神力、地球上にいる神とは比べ物にならないくらい莫大な。

その圧力で八雲は意識を失いはしなかったが、片膝をついて、苦しそうにしている。

対して、影秋はそんな神力何処吹く風と言った様子であった。

「貴様は世界の理を破った。」

「其れは、許されざることぞ。」

その神は手に大剣をだし、影秋に一振りした。

その様子を八雲は見て、影秋は死んだ。

そう思ってしまった。

だが現実には違った。

影秋の身に大剣は届いておらず、大剣は影秋の前に展開された、歪と呼べるほど書き込まれた障壁によって防がれていた。

身体からは魔力とも霊力とも神力とも妖力とも取れない不思議なものを放っていた。

色は半透明で、神力、霊力よりも神秘的で影秋の命を表しているかのようにだった。

「ほう、やるのう。魔法陣ごときで・・・」

相手の神は何度も何度も打ち付けるが、まったく影秋の身には届かず障壁に輝さえ入れれない様子だった。

「何故じゃ!」

「完全物理無効化障壁これがこの障壁の名前だ。」

そう言うと、影秋は詠唱を紡いだ。

「天地を乖離す開闢の星。其の力を備えし無銘の剣その力をここに、顕現させよ。」

其れは、英雄王の剣
生命の記憶の原初であり、最古の姿、地獄の再現と言われた剣の力
を呼び出すための呪

「天地乖離す（エヌマ）」

「開闢の星（エリシュ）！！」

周囲に暴風が吹き荒れ、螺旋を描いたような、エネルギーの凝縮体
が、神を包み込んだ。
包み込まれると同時に、完全に消滅した。

「大丈夫ですか？八雲さん」

「……」

「え？、無視ですか？」

八雲は思っていた。
ありえないと、ただの人間が持つには……いや、ただじゃなくて
もありえないほどの威力だった。

そのため、少し呆けてしまっていて、影秋が近くまで来るのに気づいていなかった。

「すみませーん。大丈夫ですか？」

「え、ええ。」

「其れよりここ、離れてください。」

「何故？」

「またきますよ。さっきの以上が。」

「・・・いえ、みて行きますわ。ここは幻想郷私が作った楽園なのですから。」

そう言って八雲は、スキマを開いて其処からみることにしたらしく、其の中に入って行った。

「よお、人間。」

「誰だ。」

「我^{オレ}か？所謂創造神だ。」

「で、そうか。創造神であろうと何であろうと、倒してやるよ！」

そうすると、創造神と名乗ったそいつはガハハハと豪快に笑った。

「気に入った、気に入ったぞ！人間。名は名はなんと言う？」

「偽亭影秋だ。」

「そうか、影秋！我がこの世界にいられるようにしてやるよ！！！」

また創造神はガハハハハハと笑い出した。

「あんたの名前は？」

「ハハハハハ・・・名前？創造神じゃな。」

「じゃあ創造で言いか。」

「そうだな！それで良いぞ！」

「お待ちください！創造神様！」

「こんな下種殺せば言いのです！！」

そう言いながら、上級神らしき神が影秋に切りかかってきた。

「楽しくなってきたな！！」

創造神は完全に傍観らしい。

「ハアアアアア」

切りかかってきた刃を障壁で防ぎ。
相手を見据えた。

「いいよ、望みどおり殺してやる。」

影秋の黒かった眼が黒から金へと変化した。

「知ってるか？万物には脆いところがあるんだってよ、ステイクさん」

「なぜ、私の名を！」

そう言ってステイクと言う名の神は、剣を影秋に振り落としたが其の剣を影秋は両断した。

「まあ、お前は死んでくれ」

冷たく言い放つと影秋は、ステイクの首、腹、右腕を切断し、最後に確立を操って完全に殺した。

「凄いな！よし決めた！我と戦ってもらおう！」

そう言って創造は、影秋に襲い掛かってきた。

八雲との出会い、そして神との戦いの話（後書き）

エヌマ・エリシュは、某英雄王さんの宝具の能力を使う魔法です。
色々な宝具の力を使えます。

魔眼ですが、近いうちに正体を明かします。

よかったら感想お願いします。

神との戦いの話（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

神との戦いの話

「創造ね・・・一つだけ説明しよう。」

「なんだ？」

「俺が使っている魔法についてだ。」

そう影秋が使っている魔法は、英雄王の宝具を真似た物などではなく、この世界が型月で在ったなら、魔法と呼ばれてもおかしくないものだ。

「再現の魔法と言う。」

「再現の魔法はな、簡単に言えばありとあらゆる万物、能力、特性全てを再現できるいや、再現と言うよりは自分の能力として扱えるんだよ。」

片膝をついている八雲紫や対峙している創造神ですら、啞然とした。影秋が言っている事はなんら創造と言うものと変わないのだ。だが、創造のように一から物を創るのではなく、あるものをモチーフに創るため、時間もかからなければ、魔力も食わない、まるで神

のごとき力を手に入れているのだから。

「見せてあげよう。完全なる再現を・・・」

影秋がそう宣言すると、影秋の右肩から、指が三本しかなく酷く不恰好な右腕が生えてきた。

だがその腕は、出したと同時に分解し始めていた。

「・・・まあ、今の状態じゃ不完全か。」

「だが、『聖なる右』其れくらい聞いた事あるだろう。」

これほどの物となると、いくら魔力消費が少ないと言っても影秋の魔力の総数の8割は持つて行かれてしまうそれに加えて身体に莫大なダメージを受けてしまう。

影秋は聖なる右を発動するための術式や必要な天使の力^{テレスマ}全てを無視しているため、負荷が高くなってしまう。

そして、影秋は慈悲も無く、聖なる右を振るった。

瞬間、聖なる右は適切な攻撃を選択し、放った。

「クソガアア！」

聖なる右の一撃を創造神は其れとほぼ同等の攻撃で相殺しようとし、攻撃を放った。

放った攻撃に色は無く、破壊の意味のみの攻撃であった。

一瞬聖なる右の攻撃と均衡するも、どちらも相殺し、攻撃は消えた。

だが、影秋はそれだけでは止まらなかった。

最強である聖なる右を囿に使い、本命の攻撃を当てるために動いていたのだ。

「全てを（イコール）」

「否定する剣（ヂ・ノツド）」

影秋はあの自身と言ってもそういない空間で手に入れた黒く、刀身が途中で折れているかの様な剣を持っていた。
そして、真名をつむいだ。

「なにい!？」

全てを否定する剣を創造神の前に向けると同時に、其処から先の空間が根こそぎ消えていた。
跡形も無く、何も残さずに。

「まさか・・・初戦闘が神様とはね・・・」

はあと影秋はため息をつきながら、其の場に座りこんだ。

影秋が神を殺したのを見たと同時に八雲紫は気が緩んでしまったのか、気絶してしまった。

それに気づいた影秋はどうしようかと小一時間悩んだらしい・・・

神との戦いの話（後書き）

またもやグダグダです。

これを書いているとき作者はダイ・ハード見てましたが、ダイ・ハードは面白いですね！
まったく関係ないですが。

感想とう待ってます

八雲家の話（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

八雲家の話

「で、説明してくれるわよね？」

影秋は今、マヨイガに在る八雲亭に来ていた。

「少し、前まで気絶してたのに凄い上から目線だな・・・」

「・・・何か言ったかしら？」

何故だろう、このときだけはどんな魔法、魔術を持っても八雲に勝てない気がしなかった。

「・・・ごほん。で、説明してくださいな。」

「はあ・・・じゃあ何処から聞きたいんだよ？」

「まずはあの目が金色になった眼のことからお願いするわ。」

「あの眼は・・・簡単に言っちゃえばありとあらゆる物事を視ることが出来るんだよ。」

八雲は何も言わなかったが、其の目は完全にうわ、何このチート野郎見たいな事を言っていた。

「じゃあ、あの再現の魔法は？」

「あれかー理論とかはいらないよな？」

「ええ、言われてもたぶん理解できないわ。」

「だろうなあ。」

「アレ・・・だったら説明するところなくね？」

「じゃ、じゃあ、あのありえないほど魔力を内包した剣二振りわ？」

「片方は厳密には剣じゃ無いんだけどな。」

それから影秋は少しの間、乖離剣エアについて語っていた。

「へえ、そうなの。」

「分かってくれたか？」

「一応。」

「で、この拘束とってくれないか？」

影秋は、話に夢中になっていたせいか、両手両足を完全に封じられていたのだ。

両手には魔力を封印するためであろう、術式の書かれた御札が張っており、両足はスキマに捕らえられていた。

「それは無理な相談ね。」

「どうやったら、取ってくれるんだ？動きずらすぎる。」

「そうね・・・貴方がこのマヨイガに向こう500年暮すと言うのはどうかしら？」

「んう・・・」

「だったら式になる？いいえ、なりなさい！」

「え！？嫌だよ！だったらここに暮すよ！」

暮すといった瞬間よく分からない術式が発動した。

「は！？」

「その言葉を待ってたわ。」

「これは・・・一秒ごとに術式が変化してる上に解除には10秒かかるだ・・・」

絶対解けねえじゃねえかと影秋は思ったものの、無理やりやれば出来るなと思ってもいた。

「まあ、ここで幻想郷に本当に危害を加えないことが分かったら、直ぐに解くわよ。」

「そうか、だった・・・ら・・・いい・・・か・・・」

影秋はそう言うと同時に気絶してしまった。

既に影秋の魔力は底を尽いていたし、初の戦闘と言うことで精神的にも疲弊していたため、身体が勝手に休息を取ってしまったのだ。

「・・・意外と可愛い寝顔してるじゃない。」

ずっと小難しい顔をしてるのに寝てるときはまるで夢見る少年ね。と八雲は思っていた。

八雲は影秋を縛っていた拘束を外して、膝枕をすることにした。

その姿を自分の式に見られて、赤面したのは言うまでも無い。

八雲家の話（後書き）

前回出てきた武器紹介

乖離剣エア

元ネタ fate／stay night
ギルガメッシュの宝具

古代メソポタミアで天地を切り裂き、世界を創造した『世界を切り裂いた』名に違わず、その一撃が破壊するものは物理的なものならず空間、「世界」を切り裂き破壊する。

全てを否定する剣

元ネタ 作者の自作宝具 （オリジナル小説の武器）

全を否定する剣 （イコール・ヂ・ノッド）

リンク…EX

種別…対界宝具

由来…無し

全てを否定し、意味を剥奪する剣。

どのような宝具、魔術、攻撃によっても破壊されない。剣に触れたものは、存在の意味を無くし消滅する。

だが、この剣は存在しているだけで、意味を剥奪しているため、常時、魔力を吸い取っている、魔力が尽きた場合は次に魔力に近いものの、その全てが無くなった場合所有者の生命力を食らう。

真名開放は二つあり、全てを否定する剣（イコール・ヂ・ノツド）は、所有者の視界に存在する全てを無に帰す。

そして我、還す（ウィ・リザイン）は、全てを否定する剣、自体を無に帰し、所有者に関わる全ての事象を無にする、一時的に能力値の幸運以外全てをEXとする。だがこれを使用した場合、全てを否定する剣は二度と使えなくなる。

DKさん感想ありがとうございます。

うまく纏められている文章力がすばらしいとは有難うございます。

解説今回から入れるようにしたいと思います。

感想などお待ちしております！

自己紹介の話（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

自己紹介の話

「ん・・・あ？」

影秋は目が覚めたと同時に視界に二つの大きな果実が見えた。

「あら、起きたの？」

「八雲・・・か。」

「八雲じゃなくて、ゆかりんと気軽に呼んでくださいな。」

「嫌です。」

影秋は物凄いいい笑顔で切り替えた。

「そ、そう・・・じゃあ紫と呼んで。」

「分かった。」

徐々に影秋は自分が何をして何処で氣を失ったのか思い出してきた。

「そう言えばここからは出られるよな？」

「当たり前じゃない、じやなきや貴方が危険かどうか分からないじゃない。」

「そうか、俺は何処に住めば良いのだ？」

紫は其の質問にさも当然のように、言った。

「私たちの家に決まってるじゃない！」

「そ、そうか。他にもここに住んでいる奴はいるのか？」

「いないわよ。」

「そうか。」

「はあ、全く同様しないわね、冗談よ後二人いるわよ。」

「其れは人間じゃないだろ、もちろん。」

「ええ、私の式神と其の式神の式神よ。」

紫が使役する式神なのだからさぞ、強いだろうな。
いい戦いが出来そうだな・・・

「悪そうな顔してるわね・・・」

「あー、すまないな。元居た世界では派手に魔術とか魔法とか使えなかったからな。」

「それで、戦闘狂に成ったと言うわけね。」

「其処までじゃないけどな。・・・たぶん。」

紫と影秋はそのまま談笑していると、紫の背後にある襖ががらつと開いて尻尾が九本ある妖弧がきた。

「紫様、夕飯の準備が出来ました。」

「そう、今行くわね藍。」

「付いてきて、影秋。」

「ああ。」

影秋は紫の後に着いていき、居間であろう場所に案内された。其処には、先ほど着た九尾の妖弧と、猫又であろう妖獣が居た。

「影秋紹介するわね。まずは、九尾で私の式の八雲藍よ。」

「八雲藍だ。紫様に使えている。」

八雲藍と言う女性は絶世の美女と言っても過言では無いくらいの美貌を持っていた。

「で、こっちの猫又が橙よ。」

「ちえ、橙です！よ、よろしくお願いしましゅ。」

「橙……緊張するのは分かるが、嘔まないように気を付けような。」

藍と呼ばれた女性が、橙と呼ばれる少女に少し叱ったように言っているが鼻から大量の血が溢れかえっているため、全くと言って言いほど説得力が無かった。

「俺は、偽亭影秋だ。職業魔法使いだ。でお二人はなんと呼べばいい？」

「わ、私は藍で構わない。」

まだ、鼻から溢れ出している血を処理しながら言ってきた。

「橙と呼んでください！」

今度は嘔まずに言えたらしい橙を見て藍は良くやったと言いながらまた鼻血を出していた。

「はぁ、藍たら……橙の事と成ると……」

「た、大変そうだな・・・」

それから少しして、紫、藍、影秋、橙は夕飯を食べ始めた。

夜、影秋は寝れずに一人縁側で月を見ていた。

「眠れないの？」

「ああ。」

「じゃあ、お酒に付きあってくれるわよね。」

紫は手に持っていた酒ビンを掲げながら言ってきたため、別段断る理由も無かったため飲むことにした。

「別に良いぞ。」

二人で無言で飲んでいると、紫が唐突に聞いてきた。

「貴方は、いいえ、影秋は何でこの幻想郷に来たの？」

「・・・なんでか。これが俺の求める理想だったからだな・・・」

「理想・・・？」

「そう、俺が居た世界ではこの幻想郷は物語りとして語られていた。」

まあ今から約千年後の話だったかな。と影秋は言う。

「へえ・・・」

「ま、俺は其の記憶を抹消してるかた何が起こるか分からないんだがな。」

「そう。」

「まあ、ここでこの話は終わりにしよう。」

じゃあ俺は寝ると言って影秋は借りている部屋に戻って言った。

「・・・結局影秋は何でここを理想としていたかは言わなかったわね・・・」

紫の眩きは月夜の風に溶けて言った。

自己紹介の話（後書き）

今回は自己紹介の話でした。

ではまた次回

感想等まっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4041x/>

東方世界を求めた者が幻想入り

2011年11月15日00時58分発行